

学校キャンプ実施期間についての基礎的研究 II

—大阪府北摂地区高校教員の意識の分析—

○福田 芳則 (大阪体育大学) 五林 正隆 (大阪社会体育専門学校) 高見 彰 (関西女学院短期大学)

学校キャンプ キャンプ実施期間 高校教員

はじめに

文部省の自然教室推進事業、スキー・登山などをメインプログラムにした野外活動行事の増加、生活に根ざした総合・体験教育を重視しての生活科の発足など、近年学校教育における野外教育・野外活動の重要性も改めて見直されてきている。しかし、自然教室実施期間の現状は、3泊4日での実施校が全体の86%あまりを占め、4・5泊の実施校は14%弱と低率である。¹⁾ 他の学校キャンプは2泊3日以内での実施がほとんどであり、また、野外炊事、キャンプファイヤー、ハイキングなどいくつかのものに限られている実施プログラムの画一化などが指摘され、実施期間、プログラム、指導者、施設、管理面等、より多様で充実した教育内容を盛り込むために解決されなければならない問題点も多くある。²⁾³⁾⁴⁾

学校キャンプの実施期間を少しでも延長することが可能であれば、その教育的効果、レクリエーション活動への意識・態度の育成も今以上に望まれるものと思われる。学校キャンプの現状として、その企画・運営・指導は実施校の教員にゆだねている学校が多く、その成否は教員に負うところが大きいといっても過言ではない。この考え方をもとに、前回は中学校教員の学校キャンプ実施期間についての意識を分析し報告した。⁵⁾ 今回は、高校教員を対象とし、学校キャンプの実施期間に関する意識を分析し、期間延長の可能性をさぐるとともに、キャンプ実施期間を考える上での基礎的資料を得ることを目的とした。

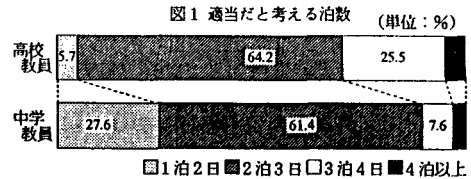
研究方法

大阪府北摂地区(茨木・高槻市)の公立高校教員(教諭)を対象に、学校キャンプ実施期間に対する意識について、質問紙による調査を行った。調査時期は1986年11月20日～12月10日で、両市内12校(教諭数男性616名、女性199名、計815名)に調査表を各15部配布し、有効回答数(率)は9校106名(58.9%)であった。

分析の方法は 1. 適当だと考える学校キャンプの実施期間(以下泊数とする場合もある)と、(1)性別(2)年代(3)教員経験年数(4)担当教科(5)引率経験(6)個人的キャンプ経験(7)キャンプ講習会参加経験(8)学校キャンプの必要性(9)キャンプに対する好嫌感との関連 2. 学校キャンプ実施期間に影響をおよぼす要因(25項目)の5段階評定得点結果と、1であげた(1)～(9)および適当だと考える学校キャンプの泊数との関連について有意差検定を行い比較検討した。また、前回中学校教員に対して行った同様の調査結果もあわせて考察を加えた。⁵⁾ なお、キャンプ期間に影響をおよぼす要因25項目については、キャンプ期間の長短を択一しその理由について自由記述で回答されたものを整理・再構成したものをを用いた。⁶⁾

結果と考察

1. 適当だと考える学校キャンプの実施期間について
高校教員の適当だと考える学校キャンプの泊数として得た回答を、前回調査の中学校教員の結果とあわせて図1に示した。

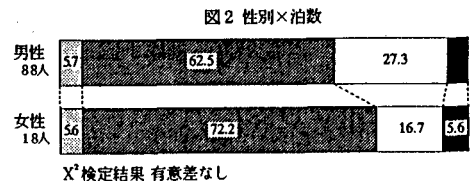


今回対象とした高校教員は、2泊3日を適当としたものが最も多く64.2%と全体の5分の3強を占めた。次に多く得られた回答は3泊4日であり、25.5%と全体の4分の1を占めている。1泊2日、4泊15日以上と回答したものは少なくそれぞれ5.7%、4.7%であった。1泊を含め2泊3日以内と回答したものは69.9%と全体のおよそ7割で、逆に3泊4日以上と回答したものは30.2%およそ3割という結果を得た。

これら中学校教員の結果と比較すると、①2泊3日が共に最頻値で回答の割合もほぼ同様である ②中学校教員のほうが高校教員と比較してより多くのものが1泊2日を志向している($P < 0.005$) ③高校教員のほうが中学校教員と比較してより多くのものが3泊4日以上を志向している($P < 0.005$)ということが言え、総じて高校教員のほうが中学校教員よりもより長い学校キャンプ実施期間を志向していることがうかがえる。⁵⁾ これらの差異は参加生徒の体力面、学校カリキュラムの融通性、事故等責任問題などに対する教員の意識・現状に起因するものと推測できる。(表1参照)

つぎに、適当だと考える泊数と、(1)～(9)についての比較結果を以下(図2～図8)に示した。なお、現状よりの期間延長という意味から、2泊3日以内と3泊4日以上との比較を中心に χ^2 検定を行った。

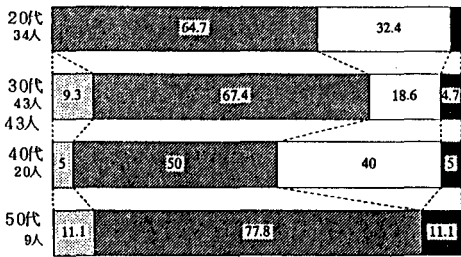
(1) 性別(男女差)における比較(図2)では、3泊4日以上と回答したものは、男性31.8%に対し女性22.1%とほぼ10%の差があったものの、有意差は認められなかった。回答割合に差はあるものの男女差が認められなかった点では中学校教員と同様の結果であった。⁵⁾



(2) 年代における比較(図3)では、3泊4日以上と回答したものの割合は40代が最も高く、20代、30代、50代の順となって

いるが有意な差はみられなかった。従って、中学校教員にみられた「若い年代のほうがより長いキャンプ期間を志向する」という結果と異なり、年代による差は認められなかった。⁵⁾

図3 年代×泊数

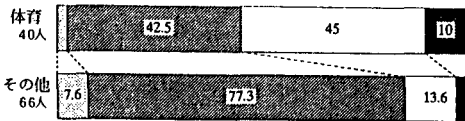


X²検定結果 有意差なし

(3) 教員経験年数における比較では、3泊14日以上と回答したものの割合は1~5年=40%、6~10年=21.9%、11年~15年=12.5%、16年~20年=40%、21年以上=28.5%であり、教員経験6~15年の中間層が若干低い割合を示したものの有意差は認められず、経験の浅いほどまた深いほどといった意味での差異はみられなかった。中学校教員の場合はこの比較を行っていない。⁵⁾

(4) 担当教科においては、体育科とその他の教科で比較を行った(図4)。3泊14日以上と回答したものは、体育科教員55%他教科の教員15.1%で、0.5%水準で有意な差が認められ、体育科教員のほうが他教科の教員に比べ2泊3日以内よりも3泊14日以上を志向していることがわかった。中学校教員の場合は、主要5教科とその他の教科との比較を行ったが有意差はみられていない。⁵⁾

図4 担当教科×泊数



X²検定結果 2泊以内よりも3泊以上を志向する 体育>その他 ※※※0.005

(5) キャンプ引率経験においては、経験の有無(図5)と経験の程度(図5-2)による比較を行った。

図5 引率経験有無×泊数

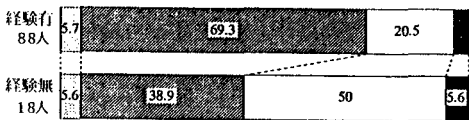
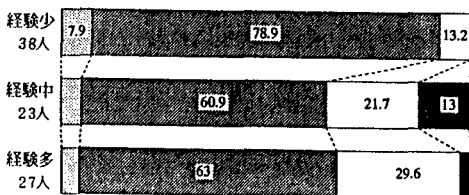


図5-2 引率経験程度×泊数



X²検定結果 2泊以内よりも3泊以上を志向する 引率経験あり<なし ※※0.01 経験少<経験中・多 ※0.05

8割以上のものが引率を経験しているが、3泊14日以上と回答したものは引率経験者25%引率未経験者55.6%で、1%水準で有意差がみられ、引率未経験者のほうが経験者に比べ2泊13日以内よりも3泊14日以上を志向していることがわかった。後述の表2から、①引率経験群のほうが指導的な問題を期間延長を阻害する要因として受けとめている、②未経験者群のほうが期間延長にともなう効果増を認めていることが明らかであり、現在の学校キャンプの現状になんらかの問題点がありそれに直面した経験者のほうがキャンプ実施期間延長により消極的姿勢を示しているものと思われる。

引率経験程度の比較は、引率経験回数1~4回を経験少群、5~7回を経験中間群、8回以上を経験多群として行った。経験少群に比べ経験中間群・多群のほうがいずれも有意に2泊13日以内よりも3泊14日以上を回答しており、引率経験回数の多いほうがより長いキャンプ実施期間を志向していることがわかった。後述の表2より、引率経験中間・多群のほうが指導的的要因を比較的問題としておらず、期間延長にともなう効果増を期待していることに起因するものと思われる。中学校教員の場合は、引率経験の多少という意味での関連は認められなかった。⁵⁾

(6) 個人的キャンプ経験においては、学校キャンプの引率以外の個人でのキャンプ参加経験の有無(図6)と、個人的キャンプの最長経験期間の長短(図6-2)について比較を行った。

引率以外での個人的キャンプの経験者は56.6%と全体の約半分強であり、3泊14日以上と回答したものは35%で経験のないもの(26.1%)より高い割合を示したものの、有意な差はみられなかった。

図6 個人でのキャンプ経験の有無×泊数

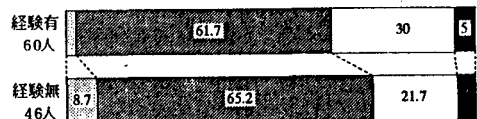
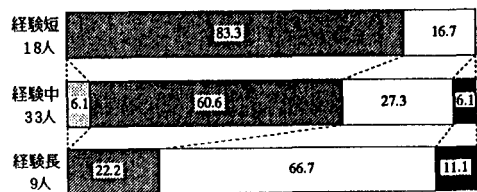


図6-2 個人でのキャンプ経験期間×泊数

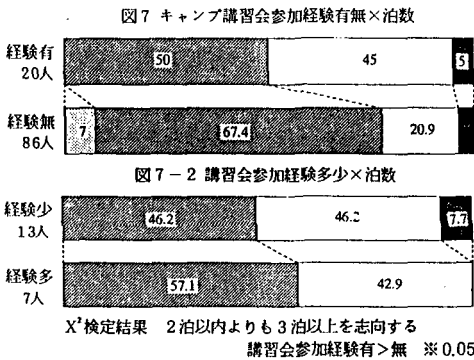


X²検定結果 2泊以内よりも3泊以上を志向する 経験短期<長期 ※※※0.005 中期・短期<長期 ※※※0.005 中期<長期 ※※※0.05

個人的キャンプの最長経験期間の長短による比較は、最長経験期間2泊13日以内を経験短期群、3泊14日~4泊15日を経験中期群、5泊16日以上を経験長期群として行った。経験長期群の3泊14日以上の回答率はおよそ8割と非常に高率を示し、経験短期・中期群との間に有意な差が認められた。より長期のキャンプを経験しているものは、期間延長にともなう効果増を認めており(表2参照)、自己の体験を判断基準として回答したことがうかがえる。5泊16日以上のキャンプ体験は、現状2泊13

1日以内で行われている学校キャンプを3泊4日以上と期間延長を肯定する考えを助長するものであり、キャンプの意義をより理解させえるものといえるだろう。なおこれらの結果は、中学校教員の場合は分析していないが、適当だと考える泊数に最長経験期間の長短が関与するとしたキャンプ期間に関するパイロットスタディーの結果と合致している。³⁾

(7) キャンプ講習会参加経験においては、参加経験の有無(図7)と参加回数の多少(図7-2)について比較を行った。キャンプ講習会に参加の経験を持つものは18.9%と全体の2割弱であり、指導的問題に強く不安をいだいているにもかかわらず(表2参照)低率であった。3泊4日以上と回答したものは、講習会参加経験者が半数であったのに対し未経験者では4分の1であり、5%水準で有意な差が認められ、キャンプ講習会に参加したもののほうがより長いキャンプ実施期間を志向していることがわかった。



キャンプ講習会参加経験の多少による比較は、参加経験回数1~2回を経験少群、3回以上を経験多群として行った。両群間の3泊4日以上の回答率には若干の差があるものの有意な差はみられなかった。

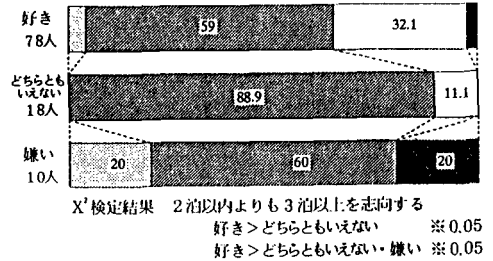
講習会参加経験者は未経験者に比べ、指導的問題を比較的不安に感じておらず、逆に期間延長にともなう効果増をより多く期待しているが、講習会参加回数の多少での比較では有意な差はみられていない(表2参照)。従って、学校キャンプ期間延長を肯定する考え方を助長するひとつの方法としてキャンプ講習会への参加があげられよう。また、参加しようという意識作り、参加しやすい環境作りを今後考えて行く必要がある。この結果は、適当だと考える泊数にキャンプ講習会の参加の有無が関与するとしたパイロットスタディーの結果と合致している。³⁾

(8) 学校キャンプの必要性における比較では、3泊4日以上と回答したものの割合は必要性あり=31.2%、どちらともいえない=30%、必要性なし=33.3%であり、有意な差はみられなかった。

(9) キャンプに対する好嫌感における比較(図8)では、キャンプを含む野外活動が好きであるという反応を示したものが全体の7割強を占め、嫌いという反応を示したものは1割弱にとどまっている。中学校教員は好感はほぼ同様の値であるが、嫌感を示したものは17.2%で高校教員のほうが低い値であっ

た。3泊4日以上と回答した割合は、好感群=35.9%で中間・嫌感群より有意に高いものであり、好感群のほうがより長いキャンプ実施期間を志向しているといえよう。中学校教員の場合も同様の傾向がみられた。⁵⁾

図8 キャンプに対する好嫌感×泊数



2. 学校キャンプ実施期間に影響をおよぼす要因について
 学校キャンプ実施期間に影響をおよぼす要因25項目に対する5段階評価の得点結果を平均値の高い順から表1に示した。なお、前回調査を行った中学校教員の平均値・順位も付記した。

表1 学校キャンプの期間に影響をおよぼす要因

順位	項目	MEAN	SD
1	教員のキャンプ経験、技術が問題となる (指)	3.887 (4.000: 1)	0.919
2	プログラムとして向を行えば良いかという教材面の不足・内容が補助となる (指)	3.830 (3.682: 6)	0.956
3	準備活動が多忙になり、引き受け手に負い難い (指)	3.801 (4.000: 1)	0.877
4	教師と生徒、生徒と生徒の相互理解がよい期待できる (目)	3.708 (3.579: 8)	0.812
5	教職員の意欲・体力に問題がおきる (指)	3.651 (3.875: 5)	0.936
6	野外活動の専門家が必要となる (指)	3.585 (3.648: 7)	1.045
7	指導者の人数が不足する (指)	3.490 (3.965: 3)	1.080
8	天候の変化等、自然の厳しさをより味わえる (目)	3.462 (3.489: 11)	0.896
9	適切な準備と余裕のあるプログラムが行える (目)	3.434 (3.331: 16)	0.936
10	時間外・超過勤務が問題となる (環)	3.405 (3.517: 10)	1.307
11	利用場所の施設・設備の不備が問題となる (環)	3.387 (3.489: 11)	0.857
12	生徒のキャンプに対する資質・能力が必要となる (主)	3.311 (3.482: 13)	1.027
13	生徒の社会性や協力の精神に向上が見られる (目)	3.264 (3.427: 14)	0.993
14	生徒が野外活動に対してより興味をいだく (目)	3.254 (-)	0.891
15	生徒の負担する経費面が無理である (環)	3.226 (3.006: 20)	0.908
16	自然をより理解し愛好するようになる (目)	3.217 (3.227: 17)	0.781
17	生徒の健康・体力に対する意識・態度がよくなる (目)	3.198 (-)	0.867
18	生徒の体力面で問題が出てくる (主)	3.179 (3.531: 9)	1.094
19	教職員の経費等、財政的に支障をきたす (環)	3.142 (2.689: 21)	1.050
20	個々人の性格の伸長・改善がより期待できる (目)	3.094 (-)	0.834
21	受け入れ施設が不足すると思う (環)	3.074 (3.420: 15)	0.979
22	事故が増え、責任問題等が増える (環)	2.867 (3.193: 19)	0.974
23	生徒の意欲が減退する (主)	2.670 (2.655: 22)	0.887
24	他の教育活動に支障をきたす (環)	2.629 (3.220: 18)	1.182
25	保護者の理解が得られない (環)	2.500 (2.524: 23)	0.808

表中MEAN欄の()内の数値は、前回の中学校教員の平均と順位を示している。表2項目欄の(指)は指導サイドの要因、(環)は施設、勤務責任等といった環境的要因、(目)は期間延長にともなう効果期待できる目的的要因、(主)はキャンプ自身の主体的要因である。

各項目の順位をみると、指導的要因が上位のほとんどをしめており、以下、目的的要因、環境的要因、主体的要因が混在している。各要因の総平均値も、指導的要因が3.708と最も高い値を示し、次いで目的的要因3.329、主体的要因3.053、環境的要因3.035であった。各項目毎の論議はにおいて総平均値のみをみると、主体的および環境的要因は学校キャンプ実施期間延長を阻害するものとしてとらえられていない。現状の2泊3日以内のキャンプ実施期間が3泊4日以上に延長された場合、期間延長にともなう効果増は認めるものの、それ以上に、教員自身の経験・技術など専門性や意欲の問題、企画・運営も含めた担当者の負担、野外プログラム内容の不足・不備などといった指導サイドの問題が高校教員の意識の上に大きな不安として立ちだかっているといえる。

中学校教員の場合も、総平均値は指導的要因=3.862、目的的要因=3.410とやや高い値を示しているが、効果増は認めるものの指導的な面で問題があるという考え方は同様である。主体的要因、環境的要因も中学校教員の方が高い値を示しており(それぞれ3.223、3.123)、その数値からわずかではあるが中学校教員の方がキャンプ期間延長にとって阻害的なものとしてとらえているものと思われる。項目別にみて特に中・高教員で異なる点は、他の教育活動に支障をきたす(中>高)、教員・生徒の財政的支障(高>中)、生徒の体力的問題(中>高)、受け入れ施設の不足(中>高)、事故等責任問題(中>高)などが上げられる。⁵⁾

つぎに、学校キャンプ期間に影響をおよぼす要因をさらに分析するために、性別、年代、教員経験年数、担当教科、引率経験、個人的キャンプ経験、キャンプ講習会参加経験、学校キャンプの必要性、キャンプに対する好悪感、適当だと考える割合の違いによる差を比較し、その結果を表2に示した。

(1) 性別(表2-A欄)においては、指導的要因に差がみられ、女性の方が期間延長を阻害する要素としてより強く受けとめている。他の要因には差はみられなかった。

(2) 年代(表2-B欄)においては、主体的要因をのぞいて指導、目的、環境的要因に有意差がみられた。指導的要因では、20代が30代以上に比べ有意に低い値を示しており、30代以上の方が阻害要素としてより強く受けとめている。しかし、年代の低い高いという意味での関連があるとはいきれない。目的的要因については、30代が他の年代より有意に低い値を示し、期間延長にともなう効果増をあまり期待していないようであるが、年代が高いから低いからという意味での差については言及できない。環境的要因については、20代よりも30・40代のほうが、さらにそれよりも50代の方が有意に高い値を示し、年代が高くなるほど阻害的問題として強く受けとめており、中学校教員と同様の結果であった。⁵⁾

(3) 教員経験年数(表2-C欄)においては、年代と同様主体的要因をのぞいて他の要因に有意差がみられた。指導的要因では、教員経験15年未満と15年以上で有意差がみられ、教員経験の長いものの方が阻害要素としてより強く受けとめている。目的的要因では、経験年数11～15年が他の経験年数グループより、また、6～10年が最も経験年数の短いグループと長い

グループより有意に低い値を示した。しかし、教員経験年数の長短という意味からの差はないといえる。環境的要因では、最も教員経験の短い0～5年が他のグループより有意に低い値を、また、経験16年以上がそれ以下のグループより有意に高い値を示し、教員経験の長いものほど阻害的要素としてより強く受けとめている。

(4) 担当教科(表2-D欄)においては、体育科とその他の教科で比較を行った。指導的要因に有意な差がみられ、他教科教員のほうが体育科教員よりも阻害的要素としてより強く受けとめている。また、目的的要因にも差がみられ、体育科教員のほうが期間延長にともなう効果増をより認めている。なお、他の要因には差はみられなかった。

(5) 引率経験においては、経験の有無(表2-E欄)と経験の程度(表2-F欄)による比較を行った。

経験の有無において、指導的要因は経験者のほうが有意に高い値を示し、阻害的要素としてより強く受けとめている。また、目的的要因にも有意な差がみられ、引率未経験者のほうが期間延長にともなう効果増をより認めている。引率未経験者のほうが学校キャンプ期間延長により肯定的意識をもっていることになるが、この原因は、現在の学校キャンプになんらかの問題点がありそれに直面した経験者のほうがキャンプ期間延長により消極的姿勢を示しているからではないだろうか。他の要因に差はみられなかった。なお、中学校教員の場合は、どの要因にも引率経験の有無による関連はみられなかった。⁵⁾

引率経験程度の比較は、引率経験回数1～4回を経験少群、5～7回を経験中群、8回以上を経験多群として行った。環境的要因以外に有意な差がみられ、指導的要因では、経験少・中群のほうが阻害的要素としてより強く受けとめている。目的的要因では、経験中・多群のほうが期間延長による効果増をより認めている。また、主体的要因では、経験中・少群のほうがやや阻害的要素として受けとめているが、経験多群は阻害的に感じていない。これらのことより、引率経験の有無により意識に差はあるものの引率経験者の中だけでみると、経験回数が多くなればなるほどキャンプ実施期間延長に肯定的な意識をより強くするということがいえる。

(6) 個人的キャンプ経験においては、学校キャンプの引率以外の個人でのキャンプ参加経験の有無(表2-G欄)と、個人的キャンプ経験の最長泊数の長短(表2-H欄)について比較を行った。

個人的キャンプ参加経験の有無においては、どの要因にも有意な差はみられなかった。

最長泊数の長短の比較において、すべての要因に有意な差がみられ、指導的要因では、最長経験泊数1泊のものの方が経験2泊以上のものに比べより阻害的に受けとめている。しかし、経験泊数が長いものほど不安に感じているとはいきれない。目的的要因では、経験泊数2泊以上のものの方が3泊以下のものより期間延長にともなう効果増をより認めている。経験泊数が長くなればなるほどという言いかたはできないが、4泊以上の経験はキャンプ効果を十分に認めるよ

表2 キャンプ期間に影響をおよぼす要因×性別・年代・教員経験年数・教科・引率経験・個人的キャンプ経験・講習会参加経験・必要性・好嫌感・適当と考える泊数

	A 性別	B 年代	C 教員経験年数	D 教科	E 引率経験	F 引率回数	G 個人経験
指導的要因	①男性8人 ②女性18人	①20代34人 ②30代43人 ③40代20人 ④50代9人	①0-5年35人 ②6-10年32人 ③11-15年8人 ④16-20年10人 ⑤21年以上21人	①体育40人 ②その他66人	①あり88人 ②なし18人	①少(1-4回)38人 ②中(5-7)23人 ③多(8-)27人	①あり60人 ②なし46人
	①3.641 ②4.032	①3.567 ②3.721 ③3.864 ④3.794	①3.669 ②3.670 ③3.500 ④3.943 ⑤3.810	①3.543 ②3.807	①3.755 ②3.476	①3.842 ②3.783 ③3.608	①3.707 ②3.708
目的的要因	①<②※※※※ ②<③※※※※ ③<④△	①<②△ ②<③※※※※ ③<④△ ①<②③④※※	①<④※※ ②<④※※ ③<④※※ ①②③<④⑤※※	①<②※※※※	②<①※※※※	③<①※※※※ ④<②△ ⑤<①②※※※※	有意差なし
	①3.279 ②3.245	①3.370 ②3.106 ③3.350 ④3.556	①3.339 ②3.170 ③2.929 ④3.271 ⑤3.449	①3.439 ②3.223	①3.222 ②3.532	①3.090 ②3.360 ③3.291	①3.298 ②3.245
環境的要因	①3.028 ②3.069	①2.849 ②3.078 ③3.081 ④3.431	①2.829 ②3.070 ③3.016 ④3.225 ⑤3.244	①3.038 ②3.030	①3.061 ②2.910	①3.046 ②3.125 ③3.028	①3.000 ②3.082
	有意差なし	②<①※※※※ ③<①※※※※ ④<④※※※※	③<①※※※※ ④<②△ ⑤<①※※※※ ②<①※※ ③<④※※※※ ①②③<④⑤※※※※	②<①※※※※	①<②※※※※	①<②※※※※ ③<①※※※※ ④<③※※※※	有意差なし
主体的要因	①3.011 ②3.259	①3.000 ②3.085 ③3.133 ④2.926	①3.038 ②3.052 ③3.042 ④3.167 ⑤3.032	①2.933 ②3.126	①3.098 ②2.833	①3.263 ②3.145 ③2.827	①3.017 ②3.101
	有意差なし	有意差なし	有意差なし	有意差なし	有意差なし	④<①※※※※ ⑤<②※※ ⑥<①②※※※※	有意差なし

	H 個人経験最長泊数	I 講習会参加経験	J 講習会参加回数	K 必要性	L 好嫌感	M 適当と考える泊数
指導的要因	①1泊5人 ②2泊13人 ③3泊15人 ④4泊以上27人	①あり20人 ②なし86人	①1-2回13人 ②3回以上7人	①あり93人 ②どちらとも10人 ③なし3人	①好き78人 ②どちらとも18人 ③嫌い10人	①1泊6人 ②2泊68人 ③3泊27人 ④4泊5人
	①4.057 ②3.626 ③3.581 ④3.751	①3.436 ②3.771	①3.319 ②3.653	①3.694 ②3.757 ③3.952	①3.667 ②3.706 ③3.929	①4.190 ②3.721 ③3.582 ④3.629
目的的要因	②<①※※ ③<①※※※※ ④<①△ ②③④<①※	①<②※※※※	有意差なし	有意差なし	①<②※ ②③<④※	②<①※※※※ ③<①※※※※ ④<①※※※※ ⑤<②△ ②③④<①※※※※ ⑥④<①②※
	①3.286 ②3.110 ③3.257 ④3.413	①3.529 ②3.219	①3.473 ②3.633	①3.336 ②2.971 ③3.281	①3.375 ②2.992 ③3.000	①3.024 ②3.090 ③3.725 ④3.657
環境的要因	①2.800 ②3.308 ③3.008 ④3.014	①2.938 ②3.058	①2.913 ②2.982	①3.028 ②2.913 ③3.667	①3.014 ②2.889 ③3.463	①3.625 ②3.077 ③2.736 ④3.775
	①<②※ ②<③※ ③<④△	有意差なし	有意差なし	①<②※※※※ ②<③※※※※ ③<④※※※※ ①②③<④※※※※	①<②※※※※ ②<③※※※※ ③<④※※※※ ①②<③※※※※	③<①※※※※ ④<②※※※※ ②<①※※※※ ⑤<④△ ②<①※※※※
主体的要因	①3.667 ②2.846 ③3.133 ④2.914	①2.833 ②3.105	①2.767 ②2.952	①3.029 ②3.000 ③4.000	①3.060 ②2.944 ③3.200	①3.378 ②3.162 ③2.716 ④2.533
	②<①※ ③<①△ ④<①※※※ ②③④<①※※	①<②△	有意差なし	①<②※※※※ ②<③※※※※ ③<④※※※※ ①②<③※※※※	有意差なし	②<①※ ③<①※※※※ ①<②※※※※ ④<①※※※※ ④<②※ ⑤④<①②※※※※

△P<0.1 ※P<0.05 ※※P<0.01 ※※※P<0.005

うになる可能性があると思われる。環境的要因では、最長経験泊数2泊のものほかの泊数のものより阻害的にとらえているが、経験泊数の長短という意味での関連は言及できない。主体的要因では、経験泊数1泊のものが2泊以上のものに比べより阻害的に受けとめている。しかし、経験泊数が長いものほど不安に感じていないとはいきれない。

(7) キャンプ講習会参加経験においては、講習会参加経験の有無(表2-I欄)と、講習会参加回数の多少(表2-J欄)について比較を行った。

講習会参加経験の有無においては、環境的要因をのぞいて有意な差・傾向がみられた。指導的要因では、参加経験のないもののほうがより阻害的に受けとめており、目的的要因で

は参加経験のあるもののほうが期間延長にともなう効果増をより認めている。主体的要因では、参加経験のあるものは阻害的に受けとめていないが、経験のないものは逆にやや阻害的に受けとめている。

講習会参加回数の多少による比較では、対象人数が少ないせいもあって有意な差はみられなかった。

(8) 学校キャンプの必要性(表2-K欄)においては、指導的要因をのぞいて、目的的要因に有意な差がみられた。目的的要因では、学校キャンプの必要性を感じているものほど期間延長にともなう効果増を認めている。環境的、主体的要因では、学校キャンプの必要性を感じていないもののほうがより阻害的なものとして受けとめている。

(9) キャンプに対する好嫌感(表2-1欄)においては、主体的要因をのぞいて、指導的、目的的、環境的要因に有意な差がみられた。指導的、環境的要因では、はっきりと嫌感を示すもののほうがより阻害的に受けとめている。目的的要因では、逆にはっきりと好感を示すもののほうが期間延長にともなう効果増を認めている。中学校教員の場合は環境的要因にのみ同様の結果がみられたが、他の要因については差はなかった。

(10) 適当だと考える学校キャンプの泊数(表2-4欄)においては、すべての要因に有意な差がみられた。指導的要因では、1泊と回答したものが最も阻害的にとらえている。また、2泊以内と回答したもののほうが3泊以上と回答したものに比べより阻害的にとらえている。目的的要因では、3泊以上と回答したもののほうが期間延長にともなう効果増を高く認めているが、2泊以内と回答したものはほとんど認めていない。環境的要因では、2泊および3泊と回答したものはほとんど阻害的にとらえていないが、逆に1泊および4泊と回答したものはより阻害的なものとして受けとめている。しかし、適当だと考える泊数の長短との関連は言及できない。主体的要因では、1泊と回答したものが最も強く、ついで2泊と回答したものが阻害的にとらえており、3泊以上と回答したものは逆に阻害的にとらえていない。中学校教員の場合は、ほとんど同様の結果で、2泊以内と回答したものは、目的的要因をのぞいてより阻害的な受けとめかたをしていた。⁵⁾

まとめ

以上の結果を総括すると、

1. 約64%のものが2泊3日を、約70%のものが2泊3日以内を、また、約30%のものが3泊4日を適当な学校キャンプの実施期間として考えており、中学校教員と比較して、より長い実施期間を志向している。
2. 適当だと考える学校キャンプ実施期間に影響をおよぼす要素として、担当教科、引率経験、個人的キャンプ経験、キャンプ講習会参加経験、キャンプに対する好嫌感があげられる。
①体育科教員、②キャンプ引率未経験者、③キャンプ引率経験者のうち引率回数が多いもの、④5泊6日以上の個人的キャンプ経験者、⑤キャンプ講習会参加経験者、⑥キャンプに対して好感をもっているもののほうが、3泊4日以上学校キャンプ実施期間をより肯定している。
3. 学校キャンプ実施期間が3泊4日以上になった場合、中学校教員と同様に、期間延長にともなうキャンプ効果の増大は認めるものの、それ以上に指導サイドの要因を大きな阻害要因として受けとめている。
4. 指導的要因については、①女性、②教員経験がより長いもの、③体育科以外の教科の教員、④引率経験者、⑤引率経験回数の少ないもの、⑥キャンプ講習会参加未経験者、⑦キャンプに対して嫌感を持つもの、⑧より短い学校キャンプ実施期間を志向しているもののほうが、より強く阻害的に受けとめている。
5. 学校キャンプ実施期間延長にともなう効果増は、①体育科教員、②引率未経験者、③引率経験回数が多いもの、④キャンプ講習会参加経験者、⑤学校キャンプの必要性をより強く

感じているもの、⑥キャンプに対してははっきり好感を示すもの、⑦より長い学校キャンプ実施期間を志向しているもののほうが、より認めている。

6. 環境的要因は、全般的には阻害的にとらえられていないものの、教員経験年数が長いものやより高い年代のもののほうが若干、学校キャンプの必要性を認めないものやキャンプに対してははっきり嫌感を持っているもののほうがかなり強く、阻害的に受けとめている。

7. 主体的要因は、全般的にみると阻害的にはとらえられていないものの、引率回数が少ないものやキャンプ講習会参加未経験者のほうが若干、学校キャンプの必要性を認めないものやより短い学校キャンプ実施期間を志向するもののほうがかなり強く、阻害的に受けとめている。

ということが明らかになった。

高校教員の意識としては、学校キャンプ実施期間が延長されるとその教育的効果が増大することは十分認めているものの、実際に延長実施となると、指導面での問題がおおきく立ちばかり、それ故、長期実施期間を適当とするものが少なかったものと思われる。今回はあくまで意識を分析することに主眼をおいて考察を進めたわけであるが、今後の課題として、学校キャンプの現状と実際の問題点のより正確で多角的な把握、指導面での問題点(技術、経験、専門性、プログラム等)を解決していく方策を検討することなどが上げられる。本研究の結果から、教員が実際に4泊以上のキャンプを体験することや、キャンプ講習会に参加することで学校キャンプ実施期間延長をより肯定的にとらえるものが増加する可能性があり、そのための意識作り、環境作りが指導面での問題点解決の一助となる。

参考文献

- 1) 吉田章：「“自然教室”を事例とした我が国における野外教育活動の実態に関する調査」『筑波大学体育科学系紀要』45~50, 11, 1988
- 2) 金田平：「野外教育で何を学ばせるか」『体育科教育』17~19, 1980. 8
- 3) 福田芳則：「キャンプ期間についての基礎的研究—中学校教員のキャンプ期間に対しての意識—」『第33回日本体育学会大会号』739, 1982
- 4) 飯田稔：「野外活動を見直す」『体育科教育』26~27, 1978. 8
- 5) 福田芳則他：「キャンプ期間についての基礎的研究—中学校教員の意識の分析—」『レクリエーション研究』54~57, 16, 1986
- 6) 江橋慎四郎編著：「野外教育の理論と実際」杏林書院 1987
- 7) 文部省初等中等教育局：「自然教室推進事業(通達)」1984. 2
- 8) 大阪市青少年活動協会：「自然教室資料集」1985
- 9) 深谷昌志：「子どもにとって「野外教育」とは何か」『体育科教育』6~9, 1980. 8